



一冊の本 『日本国憲法を生んだ密室の九日間』

十月三日にこの草稿を書き始めた。奇しくも昭和五十四年前のこの日に日本国憲法が公布された日であつた。私はこの本が平成七年に出版されていたことを知っていたら以前に紹介したベアテ・シロタ・ゴードン婦人の著書『一九四五年のクリスマス』に衝撃を受けることはなかつた。日本国憲法にこれほどまで無知だったことに恥じる。

昭和二十一年一月四日(月曜日)、朝九時頃、民政局長に緊急集合命令がかつた。その前日には、ホイットニー准将、ゲーディ、ス大佐、ハッシー中佐、ラウエル中佐が作戦準備をしたものだった。それは翌週火曜日の十二日に日本側との会議がある。そのときに憲法草案を出すというものがあつた。そして日本人が引くことを聞かないときは強引に押しつけるという方針であつた。そうしてわずかの九日間で民政局長の全頭脳を集結したこの軍事作戦は成功した。

鈴木昭典 創元社

鈴木の先述の流れがあること。押しつけとはいわぬが、日本の憲法学者グループの草案がとり入れられていたこと、GHQの翻訳版との間に日本側と国連加盟を見込んだ議論がかわされてきた等々現行憲法では若干ではあるが違いがあること、理由による。また、資料にGHQの翻訳版があり、現行憲法までの努力の跡が見られる。

この本を読むまで、私は現憲法が押しつけであるという偏見だけを持っていました。だが、それにいたる過程がこの本の第二章、マッカーサー草案への長い前奏曲(一九四二―四五)としてまとめられていて、渾身の力がかかっている。知られるが、国務次官から国務長官代理に就任したあと、ルーズベルト大統領の死によってグルー等知日派が中心となつた背景がある。彼らには、悪しき日本は改革するが日本国民が繁栄できなくなるような状況に追い込むべきではないという思いやりがあつた。日本を農業国にたたき落とせという世論のなかでである。

ネパール紀行・ネパール十年の発展(続ブータン紀行)

使っていたよつなマニ車、仏具類であつた。が、十年たつと元住坊であつただらうと思われる部分に、軒々々ひやかすには多すぎない。紐を買って探して、商品はいかに土産用の写真などが多く、十年前より良くないものばかり。それでも古仏具を扱う店一つ一つ叩いて選んだ。日本で買う思いをすれば安い。因みに、かかると、日本製の値段を知つておくことだ。そうすれば、少くも高く買つても日本の思いをすれば安いという印象は、今後はお布施をした気分になる。今回はここでインドから来た家族連れと楽しいひとときを過ごしたのが思い出だ。

この本を推すまで、私は現憲法が押しつけであるという偏見だけを持っていました。だが、それにいたる過程がこの本の第二章、マッカーサー草案への長い前奏曲(一九四二―四五)としてまとめられていて、渾身の力がかかっている。知られるが、国務次官から国務長官代理に就任したあと、ルーズベルト大統領の死によってグルー等知日派が中心となつた背景がある。彼らには、悪しき日本は改革するが日本国民が繁栄できなくなるような状況に追い込むべきではないという思いやりがあつた。日本を農業国にたたき落とせという世論のなかでである。

余録

基礎学力を論じたところ、文部省でも高校の課程が理解できない学生のための施策が問題になりだした。本当は高校のみではなく小学校からの教育課程を見直さなければならぬ。基本は理解できるものではない。問題は同じ教室におくことにより進んだ課程を、理解できないのは手を動かす等の職業教育へ進むべきで、みんなどうも大学へといふのは良くない。これは決して勉強ができるものを善く、できないものを悪とする考えではない。教育の知育・徳育・体育のうち、知育のみの話である。人間の尊厳を求め、徳育はすべからず、教育に一番欠けているのは徳育である。